

井上甫水著『漫遊記』にみる 井上円了の観光行動について

国際地域学部国際観光学科教授
堀 雅通

[要旨]

井上円了は、その生涯に、国内外、実に多くの旅行をし、そのつど旅行記を著している。本論は、井上円了の旅行記によって観光旅行者としての円了、すなわち井上円了の観光行動を考察する。円了は行く先々で観光を楽しんだ。円了にとって「観光」とは、第一に景勝地を尋ねること、すなわち景観の鑑賞にあった。各地の風光明媚が円了の心を捉えた。

井上甫水著『漫遊記』は、井上円了の学生（東京大学予備門・東京大学）時代の旅行記である。『漫遊記』は2編に分かれ、それぞれ10の小旅行記からなるが、郷里・長岡から京都までの、生まれて初めての旅行内容を綴った「西京紀行」は、その後の円了の観光行動と旅行記の特徴を知る上で重要である。「西京紀行」は円了旅行記の様式をほぼ完成させていた。

円了の旅行はほとんど遊興・観光を中心とした「楽しみ」のための旅行であった。が、こうした旅行によって、円了は広い視野と相対的なものの見方・考え方を身に付けた。それは後年の円了の比較文化・文明論、あるいは思想形成にも影響を与えている。

[キーワード]

『漫遊記』、旅行記、旅行、観光、観光行動、交遊

[目次]

1. はじめに
2. 『漫遊記』
3. 移動の方法—交通利用—
4. 旅行時の関心事—観光行動
5. むすび

1. はじめに

東洋大学創設者・井上円了は、安政5年（1858）、越後国三島郡浦村（現新潟県長岡市浦）に慈光寺の長男として生まれた。幼少時、石黒忠^{ただのり}恵の漢学塾で学んだ後、京都東本願寺で得度、同留学生として上京、明治11年(1878)、東京大学予備門に入学、明治18年(1885)、東京大学文学部哲学科を卒業した（表1参照）。卒業後は官途に就かず、終生、在野の思想家・教育者として活動した。多くの著作を遺す一方、哲学館（現東洋大学）の創設に尽力した。

表1：円了旅行記関係年表

元号年	西暦	年齢	事	項
明治10	1877	19	東本願寺教師教校入学	→ 『漫遊記』（第一編）「西京紀行」他9編
明治11	1878	20	東京大学予備門入学	
明治14	1881	23	東京大学文学部哲学科入学	→ 『漫遊記』（第二編）「房総漫遊」他9編
明治18	1885	27	東京大学文学部哲学科卒業	
明治20	1887	29	哲学館創立	
明治21	1888	30	第一回海外視察旅行	→ 『欧米各国政教日記』（1889）
明治23	1890	32	全国巡回講演開始	→ 「館主巡回日記」（1891）
明治26	1893	35	全国巡回講演終える。	→ 『妖怪学講義』創刊(1893)
明治35	1902	44	第二回海外視察旅行	→ 『西航日録』（1904）
			「哲学館事件」発生	
明治39	1906	49	哲学館大学学長辞任、東洋大学に改称	
			全国巡回講演再開	→ 『南船北馬集』（1908）
			修身教会運動、哲学堂の建設に専念。『日本周遊奇談』（1911）	
明治44	1911	53	第三回海外視察旅行	→ 『南半球五万哩』（1912）
大正8	1919	61	中国・大連で逝去	

出所：竹村[2012]40～43頁等を参照し、筆者作成。

本論は、そのような井上円了の旅行記の中で、特に東京大学予備門～東京大学時代の8年間に書かれた最初の旅行記、井上甫水著『漫遊記』を取り上げ、観光旅行者としての井上円了、すなわち井上円了の観光行動を考察する。

はじめに『漫遊記』の内容を検討し、その特徴を明らかにする（表2、表3参照）。『漫遊記』の様式は後年の旅行記の記述スタイルをほぼ確立させていた。したがって、後に書かれる円了旅行記は、いずれも『漫遊記』の記述スタイルをほぼ踏襲したものとなっている。その意味で、『漫遊記』、とりわけ最初の小旅行記「西行紀行」は、円了旅行記の特徴を知る上で重要である。

次に旅行記を通して円了の観光行動を考察する。具体的には、旅行の目的、行程、利用交通手段、同伴者、旅行中円了が関心をもった事物などを分析する。換言すれば、円了はどのような旅行をしたか。旅行中どのようなものに関心を持ったか。旅行中どのような行動をとったかを明らかにする。

『漫遊記』の旅行目的・内容は、本旅行記に「漫遊」という題名が付けられていることか

らも、当初から観光的要素を十分に持ち合わせていた²⁾。すなわち円了にとって『漫遊記』の旅行は「観光」(=漫遊)であり、観光が旅行の主目的であった。そのような「漫遊」旅行が円了にとってどのような意味をもっていたか。またそれは円了の生き方や考え方にどのような影響を与えたか。換言すれば、円了の人生にとって、旅行ないし観光はどのような意味をもっていたかを検討する。

なお、「旅行」(=旅)とは、人が自分の家を離れて、一時他の土地、あるいは遠くへ行くことをいう。また「観光」とは、人が「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とする。」(観光政策審議会、1995年答申)。このような観光の要素を備えた旅行として「漫遊」「遊観」「遊覧」「遊歴」「遊学」「交遊」などがある。ここではさしあたり「観光」を「楽しみのための旅行(travelling for pleasure)」と定義しておく。「観光」は「観光旅行」のことであり、「観光行動」と言い換えることもできる³⁾。

2. 『漫遊記』

円了は、その半生に全国巡回講演(巡講)と称し、全国の市町村を巡り、大学創設のための資金を募った。また教育勅語、修身、仏教哲学に基づく社会教育・啓蒙活動を行った。巡講の時期は二つに分れる。前期は明治23年(1890)から明治35年(1902)までで哲学館創設の資金を募ることを目的とした。後期は明治39年(1906)から亡くなる大正8年(1919)までで哲学堂の創設資金調達と修身教会運動のための活動であった。これら巡講の様子を綴った旅行記が「館主巡回日記」(前期)と『南船北馬集』(後期)である。

これより先、円了は、学生(東京大学予備門・東京大学)時代に、すでに『漫遊記』と題する(自筆本の)旅行記を遺していた。『漫遊記』は2編(第一編・第二編)に分かれ、それぞれ10の小旅行記からなる(表2、表3、参照)。著名は「井上甫水」となっているが、いうまでもなく円了自身である⁴⁾。なお、円了は、当時としては、異例ともいべき生涯に3回の海外視察旅行を行ない、それぞれ3冊の旅行記を出版している。以上のような円了旅行記の概要を表4、表5に示す。

表2 『漫遊記』第一編の概要

旅行記題名	旅行(記)期間	旅行目的、同行者	旅行行程(経由地・宿泊地)、備考
西京紀行	明治10年7月8日 ~22日	東本願寺の命により京都に行く。単独。 「故アリテ西京ニ上ル」	長岡→柏崎→今町→関川→長野→青柳→(松本)→洗馬→木曾福島→野尻→中津川→(加納)→美江寺→米原→(大津)→(山科)→京都
東京紀行	明治11年4月1日 ~7日	東本願寺の留学生として上京。単独。「求師途万里」	京都→神戸→横浜→東京

江島紀行 鎌倉紀行附	明治12年1月2日 ～4日	冬休み、友人（金北、江村）との遊興・小旅行。「江島鎌倉ヲ一見センコトヲ約シ」	東京→（神奈川）→（戸塚）→（藤沢）→江の島→（鎌倉）→金沢→（横須賀）→（横浜）→東京
日光并奥州紀行	明治12年7月14日～29日	学友（渡辺）との旅行。「旅行ニ便ナリ」「新潟ヲ遊見」	東京→（草加）→（古河）→粕壁→小山→宇都宮→（今市）→日光→（中禅寺湖）→（今市）→矢板→（太田原）→芦野→（白川）→江花→会津→上野尻→（鳥居峠）→津川→新潟→長岡
帰京途中紀	明治12年8月23日～9月1日	帰省	長岡→広瀬郷→渋沢→二居→（三国峠）→法師温泉→沼田→前橋→鴻巣→東京
熱海紀行	明治12年12月25日～明治13年1月7日	遊興。単独。「浴場ニアリテ年ヲ送り」「熱海ニアリテ年ヲ迎フ」	新橋→（神奈川）→保土ヶ谷→（藤沢）→（大磯）→小田原→熱海→（錦浦）→（網代）→熱海→小田原→東京
銚子紀行	明治13年4月2日～7日	観光旅行。単独。	校門→（本所）→（小松川）→（市川）→（船橋）→（習志野）→大和田→（佐倉）→成田→（新勝寺）→銚子→木下→（鎌ヶ谷）→（行徳）→東京
寓居記事	明治13年7月～8月	学友（同窓四、五名）と東京府下で遊ぶ。遊興。	夏の間、友人と東京西北部の礪川に仮住まい。「校牢ノ縛ヲ脱シ」二子玉川で遊ぶ。
相州遊記	明治13年12月25日～明治14年1月2日	冬休み、友人との小旅行、遊興。「相州ニ遊フ」	藤沢→江の島→鎌倉→金沢→横須賀→浦賀→（横須賀）→東京
再遊熱海記	明治14年3月29日～4月9日	友人（古屋、仲、実吉、山口）との小旅行。「閑地ヲ探テ学苦ヲ除カント欲シ同窓相伴ヒ熱海ニ遊フ」、遊興。	東京→藤沢→小田原→（吉浜）→熱海→箱根→（湯本）→（小田原）→藤沢→新橋

注：地名は、出発地、宿泊地、帰着地で、（ ）内は経由地である。
出所：筆者作成

表3 『漫遊記』第二編の概要

旅行記題名	旅行（記）期間	旅行目的、同行者	旅行行程（経由地・宿泊地）、備考
箱根客寓	明治14年7月11日～9月4日	友人（中島広・和田睦二）と避暑のため箱根に長期滞在「暑ヲ東街道箱根山間ニ避ケントシ」	新橋→（神奈川）→（藤沢）→大磯→（小田原）→（湯本）→箱根→（湯本）→東京
富士登行	明治14年8月7日～8月9日	友人3名と夏休み、箱根滞在中、富士登山「箱根寓居之際富嶽ニ一登センコトヲ期ス」	箱根→（御殿場）→（須走）→二合目→（富士山頂）→（須走）→長原→（三島）→箱根

房総漫遊	明治15年3月30日～4月9日	友人（添田・浜田・中川・加藤）4氏と房総を一周する。 「房総一周ヲ約シ」	東京→（市川八幡）→（船橋）→八幡→（五井）→（姉ヶ崎）→（奈良輪）→鹿野山→天神郷→（北条）→館山→（州崎）→根本→平館→小村→前原→小田木→千葉→（行徳）→東京
北越遊行	明治15年7月6日～9日、9月1日～9日	友人（仙田）と一緒に帰省、「帰省ノ途ニ就ク」 帰京途中の友人との小旅行。「斎藤軍氏ト共ニ郷里ヲ発シ帰京ノ途ニ就ク」	寮→（板橋）→（熊谷）→前橋→湯花→（清水峠）→六日町→浦村 浦村→（小千谷）→田麦山→（六日町）→清水村→（清水峠）→湯花→前橋→（板橋）→王子→小石川
筑波紀行	明治15年8月3日～12日	「同行スルモノ藤井宣正氏ナリ」	牛込→（千住）→（草加）→（越谷）→粕壁→（杉戸）→（幸手）→（栗橋）→磯部→筑波山→（上曾）→（大増）→笠間→水戸→大洗→（磯浜）→（銚田）→根三太→（津之宮）→（香取社）→（利根川・江戸川舟運）→（三河町）→牛込
冬夏遊跡	明治16年12月25日～明治17年1月4日	友人（土子・浜田・本間・藤山・久米・中川）と湯治。 「熱海入泉ヲ期シ」	東京→（神奈川）→小田原→熱海→（伊豆山）→（十国峠）→小田原→東京
	明治17年4月6日～7日	友人（長崎・川村・加藤）との小旅行。「江ノ島ニ遊フ」	江の島→（鎌倉）→（横浜）→東京
	明治17年7月16日～20日	帰京、単独	上野→（高崎）→渋川→法師温泉→（三国）→（関村）→六日町→（小出）→（小千谷）→浦
	明治17年7月23日～26日、29日～31日	帰省中の小旅行	隆之町学場に遊ぶ。 長岡に滞在。
	明治17年8月1日～26日	帰省中の小旅行	新潟、三条、新津、鳥越に「漫遊」する。
	明治17年9月14日～19日	帰京の旅「漫遊終ハリテ上京ノ途ニ就ク」	浦村→浦佐→清水峠（大雨のため峠の小屋で一夜を明かす）→（武生）→（湯檜曾）→真庭→（沼田）→前橋→（玉村）→新町→（本庄）→（深谷）→（浦和）→（王子）→東京
府下遊処	明治11年4月～明治17年11月11日	東京の名所旧蹟・社寺訪問記録。「府下ノ名所旧蹟ヲ尋ネタル地名及ヒ回数ヲ…掲ク」	王子飛鳥山道灌山、音羽護国寺、向島花苑、赤坂山王権現、亀戸天神、荒川薬師、堀之内妙法寺、吹上御苑、池上本門寺、堀切菖蒲、その他
豆州漫遊	明治17年12月26日～明治18年1月6日	友人（松本・藤井・吉村）、（藤井・吉村・中川・雪野）と湯治	新橋→（神奈川）→小田原→熱海→（仁田村）→（葦山村）→修善寺→三島→（軽井沢）→熱海→（真鶴）→小田原→東京

秩父遊行	明治18年4月1日 ～6日	友人（棚橋一郎）との旅行	上野→（熊谷）→（寄居）→秩父→三峰山 →秩父→（芦ヶ窪）→飯能→（箱根ヶ崎） →（拝島）→（八王子）→駒木野→東京
帰省第四	明治18年7月18 ～8月31日	友人（吉村正・高頭暢二）との帰省旅行 友人（広川広四郎）とともに帰京	7月18日～21日：上野→（高崎）→（渋川） →湯原→（湯檜曾）→（武生）→（清水峠） →六日町→浦村 7月27日～30日：長岡 8月3日：母と温泉に遊ぶ。 8月11日～23日：栃尾又→和田村→帰宅 8月28日～31日：六日町→（清水峠）→湯檜曾→高崎→東京

注：地名は、出発地、宿泊地、帰着地で、（ ）内は経由地である。

出所：筆者作成

表4 旅行記の概要—国内旅行

旅行記題名	旅行（記）期間	旅行目的・概要	備考
『漫遊記』第一編	明治10年7月～明治14年4月（東京大学予備門時代）	東本願寺の命による上洛 在学中の余暇活動 帰郷・帰京、遊興	初めての単独旅行 友人との旅行 単独旅行
『漫遊記』第二編	明治14年7月～明治18年8月（東京大学時代）	在学中の余暇活動 帰郷・帰京、遊興	友人との旅行、単独旅行
「館主巡回日記」	明治23年11月2日～明治38年8月1日	哲学館創設資金の調達 哲学、教育勅語の普及	『哲学館講義録』等に掲載。
『南船北馬集』（全16編）	明治39年4月～大正8年6月	修身教会運動及び哲学堂 創設資金の寄附金集め	「朝鮮紀行」（計3回）、 「台湾紀行」含む

出所：筆者作成

表5 旅行記の概要—海外旅行

旅行記題名	旅行（記）期間	旅行目的	旅行行程（訪問国名）
『欧米各国政教日記』	明治21年6月9日～明治22年6月28日（1年間）	欧米の政治・宗教・教育、東洋学の研究状況の視察（30歳）	アメリカ→イギリス→フランス→ドイツ→オーストリア→イタリア→エジプト→イエメン
『西航日録』	明治35年11月15日～明治35年7月27日（8ヶ月）	インドの聖蹟参拝、欧米の大学教育・経営、社会教育の視察（44歳）	インド→イギリス→ウェールズ→スコットランド→アイルランド→フランス→ベルギー→オランダ→ドイツ→スイス→アメリカ→カナダ
『南半球五万哩』	明治44年4月1日～明治45年1月22日（9ヶ月）	オーストラリア、南米など南半球を含む欧米各国の視察旅行（53歳）	オーストラリア→イギリス→ノルウェー→スウェーデン→デンマーク→ドイツ→スイス→フランス→スペイン→ポルトガル→ブラジル→アルゼンチン→ウルグアイ→チリ→ペルー→メキシコ

出所：竹村[2012]40頁、参照

「漫遊」の時期は、第一編（東京大学予備門時代）が明治10年(1877)夏から14年(1881)4月まで、経歴でいえば新潟学校第一分校（旧長岡洋学校）を辞して京都東本願寺の教師教員英学科に入学、東本願寺留学生として上京、東京大学予備門に入学し卒業するまでの4年間である。第二編は、明治14年(1881)9月、東京大学文学部哲学科に入学し、明治18年(1885)7月、に卒業するまでの期間（4年間）にあたる。

『漫遊記』は、旅行の目的、内容、日時、天候、行程、利用交通手段、同行者、訪問地の風景、名所旧跡、風俗・民俗などを漢文訓読体で綴った旅行記である⁵⁾。旅行中、円了は行く先々で様々な風物を見聞するが、とりわけ心にとまった風景、関心をもった民俗・風俗の印象や所感を簡潔に記している。ところどころに漢詩を挿入し、その折々の旅情や感慨を詠み込み、筆致は極めて自由で、このような記述スタイルはその後の円了旅行記にも踏襲されていく。したがって『漫遊記』は円了旅行記の基本様式をほぼ確立させたものとなっている。実際、その後に書かれた円了旅行記の様式・記述スタイルは晩年の『南船北馬集』まで基本的に変わらない。

『漫遊記』に記された旅行内容の概要は表2、表3に示す通りだが、「西京紀行」と「東京紀行」及び帰省、帰京を除けば、その旅行目的・内容は、題名通り、「漫遊」、すなわち遊興、観光だった⁶⁾。帰省、帰京も遊興、交遊、観光、保養の色彩が濃かった。

旅行はいずれも学校の長期休暇（春・夏・冬休み）を利用して行われた。円了は休暇に入るとほとんど旅行に出た。旅行はたいてい友人と一緒にだったが、ふいに思い立っての単独行もあった（明治13年[1880]春の銚子行き）。江の島・鎌倉、熱海はよほど気に入ったのか複数回行っている。箱根には2ヶ月滞在した（その間、富士登山を経験）。

旅行記には学業から解放された気持ちが素直に表わされている。「七月校業已ニ終リヲ告ケ・・・余輩ノ如キモ始テ校牢ノ縛ヲ脱シ鞭撻ノ苦境ヲ去リ屈蟻^{くっかく}ヲ伸フルコトヲ得タル」（「寓居記事」）、「閑地ヲ探テ学苦ヲ除カント欲シ同窓相伴ヒ熱海ニ遊フ」（「再遊熱海記」）。「寓居記事」に見るように友人と一晩中、二子玉川界隈を徘徊し、解放的な喜びを謳歌したこともある。『漫遊記』には若き円了の生き生きとした学生生活の一端が窺われる。また円了が多く学友と自由楽しく交遊・交際していたことがわかる。

旅行中、円了は行く先々の主要な神社仏閣は必ずこれを参拝している。「西京紀行」ではまず長野・善光寺の御開帳を参拝した（「朝善光寺ノ開帳ヲ拝シ」）。京都に着くやまもなく市内の著名な寺社を参拝し、京都滞在の約1年間に多くの名所旧跡を回っている⁸⁾。「凡ソ平安客舎ニ寓スル殆ト一年ニシテ其間拝観訪尋スル靈地旧蹤一々掲クル違アラス^{いとま}」（「西京紀行」）。「江島紀行」でも江の島に着くやまず島内の江島神社と三社（辺津宮・中津宮・奥津宮）を参拝した（「旅装ヲ解テ廟ニ詣ス三社ヲ巡拝ス」）。その他、鎌倉、日光、銚子、筑波、秩父など訪問地各所の寺社をこまめに参詣している。東京でも主要な寺社はこれを全て参拝、記録に留めている（「府下遊処」）。

旅行記全体にいえることは訪問地の風景描写が多いことである。風光賛美が円了旅行記の特徴である。またところどころに自作の漢詩を挿入している。漢詩の挿入は後年の旅行記でも行われている。これも円了旅行記の特徴である。名所旧跡はおおむね通覧する程度で特段深入りすることはなかったが、著名な歴史的事跡に対しては時に関心を寄せることもあった。例えば、日光東照宮、会津の戊辰戦争などについては、その想いを幾分詳しく記している。また蝉、蛙、月といった後年の旅行記にしばしば登場する事物への関心も（蛙を除き）確認することができる。なお理由は不明だが横須賀の造船所を2回見学している⁹⁾。「房総漫遊」ではたまたま友人と小学校で講演する機会もあった。「村内ノ小学校ニ至リ學術演説会ヲ開ク來聴スルモノ二百余名余輩各々二題ヲ演ス」（「房総漫遊」）。後年の巡講を彷彿させる。以下、『漫遊記』（第一編・第二編）の概要を記す。

2. 1 『漫遊記』 第一編の概要

西京紀行（明治10年6月30日～7月22日）

明治10年夏、「故アリテ」郷里・長岡から京都に上ることとなった。当時、円了は「長岡中学」の教班の身分にあったが、東本願寺の命で上洛する。

6月30日、長岡中学を辞して一旦郷里（浦村）に帰る。

7月8日、京都へ向けて出発する。途中、高取村の茶亭で休憩する。そこで親戚縁者、郷里の友人・学友たちによる壮行会が開かれた。出立に先立ち、円了は五言律詩を作る。吉井村で休憩し、夕方、柏崎に至る。急に雨となり、柏崎で一泊する。

9日、柏崎を出て一里歩き、鯨波で乗船、天候が良かったため船から米山が見えた。遠く佐渡の山も見える。船中で七言絶句を作る。午後、^{かきざき}蠣崎に着き、下船、海浜を徐行し、夕刻、今町港に着く。円了は米山を見て旅情を覚える（「顧テ故郷ヲ望メハ已ニ米山ノ一脈ヲ隔テテ遥ニ雲天外ニアリ遊子始テ他郷ニ入ルノ情ヲナス」）。

10日、今町を出て高田で休憩、昼頃、荒井に至る。さらに妙高山麓に沿って歩き、信越国境の関川に着く。異郷に入った感慨を抱く（「越山ヲ出テテ信駅ニ入ル昨日同国ノ人モ今日ハ異郷ノ客トナル心ヲ傷マシム江上ノ客是レ故郷ノ人ニ非ス遊子ノ心中憶フヘシ」）。故郷から関川まで三十里だった。

11日午後3時、長野善光寺に着く。

12日朝、善光寺の開帳を拝す。長野市内を一見し、丹波島を経て篠井に達す。川中島（古戰場）に想いを馳せる。午後、桑原を経て姨捨山の景勝を望みながら猿カ馬場峠を越えて青柳に至る。雨となる。

13日、峻険の泥道を越えて松本平に入る。松本市街を抜け、木曾街道洗馬^{せば}に宿をとる。

14日、木曾街道の溪谷に入る（「木曾峽ニ入ル林深ク道隘ク千尋ノ峻嶺ヲ戴キ一経ノ流水ヲ尋ネ桜沢ノ幽谷ヲ渉ル清風颯トシテ炎夏ヲ知ラス雲氣ヲ穿テ鳥居嶺ニ登ルー一杯ノ清泉山ヨ

り出ルアリ』)。木曾義仲の城趾がある宮ノ越を経て、夕方、(木曾) 福島に至る。

15日、早朝、福島を出立する。木曾山中の溪谷美に心打たれる(「木曾ハ僻山幽谷ノ間ニアリト雖トモ山水ノ風景ニ至テハ蓋シ之ヨリ富メルハナシ」)。旅行の苦難も風光の明媚に接することで報われるとの感慨を抱く(「山溪ノ風光耳目ヲ娛マシムルコトアリテ更ニ旅行ノ艱苦ヲ覚エス」)。

16日、野尻^{のじり}を出て二里程歩くと、(伊奈川) 橋が落ちていたため迂回する。獣道のような木曾街道の溪谷の至るところに見える大小の滝に目を奪われ、これを賛美する。(「天然ノ景色固トニ雅ナリ往還ノ人此景ヲ問ハスシテ過ルモノ多シ余景色ノ為メニ之ヲ悲ム」)。汗だけで(「熱汗背ニ溢ル」)馬籠峠、十曲峠を越える。十曲峠は信濃と美濃の国境の峠、郷里から五十余里にあった。七言絶句を作る。

17日、中津川を出発、木曾路ほどではないが険しい十三峠を越える。道の両脇に植えられた青松が日陰となり、暑さを凌いでくれる。伊勢路と西京道の岐路に達す。眼前に濃尾平野が広がる。

18日、太田川^{おた}(木曾川の「太田の渡し」)を渡り、加納^{かのう}に出る。大垣と岐阜の間の道路は人や荷車の往来が盛んだった。夜、河渡^{ごうと}(長良川)を渡り、美江寺^{みえじ}に宿をとる。

19日、赤坂^{あかさか}、垂井^{たるい}を経て、関ヶ原^{せきがはら}(古戦場)に至る。(馬)車で近江に入る。信濃・美濃国境から近江まで三十里、醒井^{さめがい}で小憩、米原に至る。郷里を出てからこの日まで雨にあわなかった日はなかったが、ようやく晴れ間がのぞく(「凡ソ家ヲ辞シテヨリ十三日迄ハ一日モ雨ニ遇ハサル日ナシ十四日ヨリ今日迄ハ一日モ雨ニ遇フタルコトナシ只今朝細雨ニ霑^{うるほ}フノミ」)。

20日、米原から(琵琶)「湖船」に乗り、11時過ぎ、近江八景を愛でながら大津に着く(「未タ中セサルニ湖面十八里ヲ帆走セリ・・・湖上ノ風景尤モ雅ナリ・・・近江八景眼中ニアリ余未タ此ノ如キ勝霊ヲ見サル也」)。五言律詩を作る。大津は、東海道、中山道、北国街道が交差する要衝、交通の往来が盛んだった。大津から(馬)車で逢坂を越え、山科で休憩、昼食をとる。山科から腕車(人力車)で京師(京都)に入る。停車場近く六条街の旅館に宿をとる。夕方、市街を逍遥する。京都の第一印象は「街衢縦横砥ノ如ク矢ノ如シ其風俗ヲ察スルニ言接巧美動作閑雅実ニ皇都ノ遺風アリ数百年定鼎ノ地タルヲ知ルニ足ル」だった。

22日、東本願寺に参詣し、夜、京極四条を散策する。

23日、西本願寺に参詣する。

24日、祇園社に参詣する。

8月7日、二条城を見る。

11日、豊国神社に参拝し、三十三間堂を見て帰る。

12日、清水寺、大谷廟を参拝する。

18日、六角堂、知恩院に参詣し、洪鐘を見る。また東大谷本廟に参り、円山温泉を一見して帰る。

20日、大徳寺、上加茂神社に参詣する。

21日、東寺を参拝する。

22日、南禅寺に参り、永観堂、黒谷真如堂を参詣する。

その後、円了は、在京1年（実際は9カ月）の間、多くの神社仏閣に参詣したが、その記録は省かれている。また多くの漢詩を作っているが、これも本旅行記には掲載を除かれている¹⁰（「凡ソ余平安客舎ニ寓スル殆ト一年ニシテ其間拝観訪尋スル霊地旧蹤一々掲クルニ違アラス且ツ其寓中稿スル所ノ詩文多シト雖トモ皆之ヲ略シ此冊中ニ載セズ」）。

東京紀行（明治11年4月1日～7日）

明治11年4月1日、円了の上京に際して東本願寺で送別会が開かれた。午後10時に帰宅し、旅行の準備をする。午前3時就寝。

2日、鉄道で神戸に行く（「鉄車ニ駕シテ神戸港ニ到ル」）。五言律詩を作る。天候が悪く、船が出港できず、4日間、神戸に滞在する。

5日、午後6時、神戸港を出航する。

6日、夕刻、遠州灘での風雨のため、7日夜9時、横浜港に入る。下船し、横浜港内の旅館に宿をとる。

8日、朝、鉄道で東京に行く。途中、車窓からの風景を堪能する（「此日天気晴朗鉄車中ニアリテ玻璃窓底ヨリ外観スルニ桃林菜圃白ヲ闕ハシ遠近ノ江山暖霞ノ中ニ浮ヒ其霽色春光形状スヘカラズ」）。

江島紀行（明治12年1月2日～4日）

明治12年1月、友人（金北氏、江村氏）と江の島・鎌倉に行く。これはそのときの旅行記である。

1月2日、午前5時、汽車で神奈川（横浜）まで行く（「鐵路ニ駕シテ神奈川街ニ至ル」）。車窓から富士山を見る（「車窓ヨリ左右ヲ望見スルニ富嶽ノ暎々タル品海ノ蒼々タル実ニ余吟眸ヲ洗フニ足ル」）。

戸塚、保土ヶ谷間の丘陵地の林の間から富士山を見る（「富嶽林際ニ出没シ山水図中ニアリテ行クヲ覚ユ」）。神奈川は神戸港と同じような地で景色がきれいだった。10時過ぎ保土ヶ谷に達する。戸塚で休憩、昼食をとる。この間も車窓から山林に見え隠れする富士山の姿が美しかった。藤沢から江の島に向かう。江の島近く再び富士山を見る。江の島が見えてくる（「左右遠山ノ海霧中ニ延出シ富峰ノ雲間ニ聳ユルヲ望ミ而シテ眼前ニ一小嶼ノ海心ニ挿マルヲ見ル所謂江ノ島是ナリ」）。江の島では恵比寿楼に投宿する。江の島三社を参拝する。洞窟を見る。夕刻、優美な月が出る（斯夕偶々月明ニ会シ夜景更ニ幽ナリ）。翌朝、朝日に輝く富士山を見る。「翌朝早起シテ四面ヲ回望スルニ朝旭波ヲ湧カシ富嶽銀ヲ輝カス其妙筆硯

ヲ以テ尽クシ難シ」。

3日、午前9時江の島を出て鎌倉へ向かう。長谷観音、大仏を参詣し、鶴岡八幡宮、鎌倉宮に参拝する。五山城址を回って鎌倉宮に参詣、金沢に向かう。金沢の旅館に宿をとる。

4日、朝、九覧亭から八景を一望する。野島渡口から「軽舟」で横須賀へ行く。正午、造船所を一見し、4時、汽船に乗り、横浜を経て東京に帰る。

日光并奥州紀行（明治12年7月14日～29日）

明治12年7月14日、学友の渡辺氏と東京・浅草を出発し、日光・奥州の旅に出る。

千住（大橋）を渡り、草加、越ヶ谷、大沢と進み、粕壁（春日部）で宿泊する。この日は九里程歩く。

15日、杉戸まで行き、そこで腕車を利用し、幸手、栗橋、利根川を渡り、中田を経て古河に至る。古河で昼食をとり車行して野木、間々田を経て小山で宿泊する。一日の行程は12里だった。この日は「清風ノ襟ヲ侵スアリテ午時トイヘトモ炎氣ヲ覚エス午后ニ至テ驟雨熱ヲ洗ヒ涼味一層ヲ加ヒ大ニ旅行ニ便ナリ」だった。途中、「^{なえた}秩田千里蓮沼ノ其間ニ交ハルアリテ頗ル風光ノ雅靈ナルヲ覚ユ」ことがあった。

16日、払暁、宿を立ち、小金井、石橋、雀宮、「宇津宮」に至り、手塚楼で昼食をとる。この日の行程は8里だった。暑い日だったが、道路には杉や松が植えられ、涼風が通った。午後は宇都宮市内の神社、学校を見学する。手塚楼に宿泊する。

17日、早朝出立、徳次郎、大沢で休憩、昼前、今市に着く。昼食をとり、（腕車で）日光へ向かう。午後1時前、日光に着く。鉢石町紙屋半平を宿とする。この日は曇りで蒸し暑かったが、夜雨が降り、涼気を呼んだ。徳川・日光について詳しく記す。

18日、朝8時、道案内を雇って東照宮を参観する。「本社ヲ礼拝シ靈廟ニ昇ル其美麗心ヲ奪ヒ其彩光目ヲ瞠シ称スルニ語ナク筆スルニ字ナシ」。午後、霧降の滝に遊ぶ。

19日、6時、中禅寺湖に遊ぶ。午後、華巖の滝、裏見の滝を見る。

20日、払暁、日光を立って今市から道を東方にとり、白川（白河）に向かう。大渡を経て、鬼怒川を渡り、舟生で休憩する。玉生、高内を経て矢板に宿をとる。この日は酷暑の上、腕車を利用することができなかった（「此日酷暑燃ルカ如シトイヘトモ駅ニ車馬ナク村ニ休亭ナク歩行甚タ勞セリ」）。夜は雨が降り涼しかった。

21日、矢板を立ち、沢村、薄葉を経て太田原に向かう。この間、人家はほとんどなく、原野（那須野）だった。太田原から奥羽本道に入る。鍋掛から中川を渡り、越堀を経て芦野に至る。芦野に宿をとる。この日の行程は8里余りだった。

22日、午前3時に宿を立つ（「暁三時客舎ヲ発シ燭ヲ提テ行ク」）。6時、（栃木・福島の）県境の明神に到達する。白坂を経て昼頃白川に至る。白川は、水戸、仙台、会津の分岐点であり、交通の往来が盛んだった（「白川ハ宇都宮ニ次ク都会ニシテ是ヨリ水戸仙台会津ニ至ルノ三道相分ル故ヲ以テ街路車馬織ルカ如ク行人附クカ如シ」）。白川から会津に向かう。蟬の

声が盛んに聞えた。上小屋に着く頃、雷雨となり、江花に宿をとった。

23日、江花から険悪な勢至堂（嶺）を上る。三代、福良、赤津、原、赤井の5村を経て、午後6時、会津若松城下に着く。白川から会津まで約17里。境坊清水楼に宿泊する。

24日、宿に学友（佐藤氏）が訪ねてくる。「一笑一談時ヲ移ス」「氏ト共ニ城墟ヲ一見スル」。

25日、会津を立って、高久村、坂下村を経て、羽黒村に至る。本道の橋が流され、迂回し山間の間道に入るが、道に迷う。夕方、ようやく上野尻に着く。

26日、上野尻を立って室坂を過ぎ、鳥居嶺（峠）を越える。午後3時、津川に着く。雷雨にあう。ずぶぬれになって天満川を渡る。

27日、朝、客船に乗る。午後7時、新潟に着く。

28日、新潟を「遊見」する。

29日、汽船にて長岡に帰る。

帰京途中記（明治12年8月23日～9月1日）

明治12年8月、帰省し、半月余り実家に滞在、23日、帰京の途に就く。

23日、「郷関ヲ辞シ東京ニ上ル山路ヲ跋涉シテ広瀬郷ニ入り」旧知を訪ね、そこに一泊する。

24日、もう一泊する。

25日、徒歩で渋沢まで行き宿泊する。「此日晴又雨泥路甚タ勞ヲ覚ユ」。

26日、三国街道を行く。関を経て、三国峠を越え、夜、二居に至り、宿をとる。

27日、夕方、法師温泉に宿をとり入浴する。「行路虎病流染ノ地ヲ履ムヲ以テ其余毒ヲ払ハン為ナリ」だった。

28日、法師温泉に滞在。

29日、山路を通り、沼田に行く。沼田に宿をとる。

30日、前橋に行く。

31日、徒歩と（馬）車で中仙道に出て鴻巣に至る。雷雨で休憩しているうち夕方となり、鴻巣に宿をとる。

9月1日、（馬）車で午後1時、東京に帰る。

熱海紀行（明治12年12月25日～明治13年1月7日）

明治12年12月25日、午後、東京・新橋から汽車で神奈川まで行く。神奈川から徒歩で保土ヶ谷まで行く。保土ヶ谷に宿をとる。

26日、保土ヶ谷から徒歩で藤沢に行く。藤沢から（人力）車で大磯に行く。大磯から再び徒歩で小田原に行く。夕方となり、小田原に泊まる。

27日、小田原から石橋山を経て海沿いの道を進み、熱海に向かう。熱海の地理についてやや詳しく記す。熱海を「小蓬莱」に喩える。

31日、「浴場ニアリテ年ヲ送」る。

明治13年元旦、熱海で新年を迎える。釣舟をやとって錦浦を経て足代（網代）港に行く。正月、熱海に滞在する。

6日、熱海を立つ。小田原に一泊する。

7日、馬車で帰京する。

銚子紀行（明治13年4月2日～7日）

明治13年4月2日、朝、校門を出て、本所、小松川を経て「田徑ヲ渉ル」。江戸川を渡って鴻台に上り、城趾を一見する。午後、市川を経て船橋に入る。習志野兵營を見る。夕方、雨空となる。「脚疲ルルコト甚シ」。少し休み、大和田まで行き、夕方となり、宿泊する。

3日、風雨の中、印旛沼に沿って旧井に入る。午後、佐倉に着く。雨強くなる。泥道を進む。中川村から道を転じて宗吾廟に参詣し、成田に向かう。「晚風雨ヲ吹き天暗ク泥深シ衣襟湿テ将ニ滴ラントス」。

4日、午前、雨の中、仏閣（新勝寺）に参詣する。「大堂巍然トシテ壯觀目ヲ驚ス傍ラニ花園アリ」。午後、雨の中、3里程歩き、源田（渡頭・船着場）に着く。雨も止み、夜9時半、汽船に乗り、翌朝6時、銚子に着く。午後、宿舎を出て海浜を散策する。景勝を見つける。太平洋を見る。

6日、曇天。晴れる見込みがないので鹿島行きを中止し、10時、汽船に乗る。夜9時、^{きおろし}木下渡口に着き、旅館に入る。

7日、江畔を歩き、鎌ヶ谷を経て、八幡に至る。行徳から汽船で東京に帰る。

寓居記事（明治13年7月）

明治13年7月、夏休みに入る。友人四五名と共に礪川久堅坊を幽居とする（「明治十三年之夏七月校業已ニ終リヲ告ケ暑中休暇ニ会ス余輩ノ如キモ始テ校牢ノ縛ヲ脱シ鞭撻ノ苦境ヲ去リ屈蟻ヲ伸フルコトヲ得タルヲ以テ同窓四五名ニ咨リ幽居ヲトシテ閑地ニ就カントス之ヲ礪川久堅坊ニ得タリ乃チ余暑中ノ僑居トナス」。「僑居」は伝通院の近くで「松竹屋ヲ擁シ鶏犬庭ヲ護ス月色蟬声恰モ塵界ヲ去テ仙郷ニ遊フカ如ク幽趣閑興真ニ味フルニ堪タリ」だった。

月夜に学友と酒宴を開く（「一夕親友四五名ヲ会シテ清宴ヲ開ク・・・各々郷歌ヲ発ス献酬数行杯盤狼藉酒尽キ殺空フシテ皆散ス」）。また同窓と共に夜を徹して二子玉川に遊ぶ（「玉川ノ上ニ達ス前岸ニ渡テ二子村ニ憩フ・・・晩ニ楼ニ登リ杯ヲ呼テ酌ヲ命ス・・・余輩酔后又歩ヲ散シテ通衢ヲ徘徊シ玉川ノ上ニ至ル鏡光水ニ映シテ波上銀ヲ湧カス清景咏スルニ堪タリ・・・翌朝^{つえ}吟箒ヲ曳テ東京ニ帰ル」）。

相州遊記（明治13年12月25日～明治14年1月2日）

明治13年12月25日、孤樵処士（友人）と（相模国）江の島・鎌倉に行く（「相州ニ遊フ」）。

26日、藤沢を出て、27日、江の島に泊まる。

28日、片瀬から鎌倉に入る。終日、鎌倉の旧趾を彷徨する。

29日、金沢に休泊し、八景を観る。

30日、小舟に乗り、横須賀に行き、宿をとる。

31日、横須賀港から浦賀に行く。浦賀で年を越す。

明治14年元旦。

2日、浦賀を立って横須賀に行く。造船所を見学し、汽船で夕方帰京する。

再遊熱海記（明治14年3月29日～4月9日）

明治14年3月下旬、試験終わる（「明治十四年三月下旬試業正ニ訖ル閑地ヲ探テ学苦ヲ除カント欲シ同窓相伴ヒ熱海ニ遊フ」）。

29日、午後、出発。藤沢から小田原に行く。

31日、午前、小田原から（湯河原の）吉浜に行く。新道が完成していないため険しい道歩く（「新道未タ全ク成ラズ石立チ樹臥シ歩行甚タ勞セリ」）。吉浜から熱海までは道は平坦だった。午後2時、熱海着。鈴木に宿泊する。

4月1日、終日、海浜に遊ぶ。

2日、保養。

3日、村外を歩く。

4日、金山に登る。高い山で道は険しかったが、頂上の展望はすばらしかった。富士山も見えた。「絶観尽クシ難シ」だった。山を下りて、湯河原で入浴し、夕方、（熱海の）宿に帰る。

7日、熱海を立って金山に登る。途中道に迷うが、午後箱根に着く。芦之湯に入り、木賀で休憩し、宮之下の奈良屋に一泊する。熱海から箱根までの山路は5里、箱根から宮之下まで3里。「山中ノ清景賞スルニ堪ヘタリ」。

8日、奈良屋を立ち湯本に行く。福住楼で休憩し、小田原を経て藤沢に至る。藤沢に宿をとる。

9日、藤沢の若松屋を出て、午後1時、新橋に着く。同行の古屋・仲氏と分かれ、実吉・山口両氏と着京の小宴を開いて帰る（「実吉山口両氏ト橋畔千登世楼ニ上リテ着京ノ小宴ヲ開ク一醉シテ又袂を分ツ」）。

2. 2 『漫遊記』第二編の概要

箱根客寓（明治14年7月11日～9月4日）

明治14年7月、中島広・和田睦二氏と共に避暑のため箱根に行く約束をする（「明治十四年七月中島広和田睦二氏ト相約シ暑ヲ東街道箱根山間ニ避ケントシ十一日校ヲ発シテ途ニ就ク」）。新橋から汽車に乗り、神奈川で休む。藤沢で昼食をとり、大磯に泊まる。「清風涼月一樓ノ風趣実ニ雅ナリ」だった。

12日、炎晴、宿を立つ。小田原を経て湯本で昼食をとる。箱根の地理、風俗、社寺、温

泉、名所由縁などについて詳述する。箱根の風光を賞賛する。「(茶之子) 坂ヲ下リテ丁余樹間湖水ヲ一望スベシ此処富峰ノ景尤モ雅ナリ嶽色水中ニ倒ニ相映ス箱根絶勝ノ一ナリ)。

元箱根にほぼ2カ月滞在し、9月4日、湯本から車行して即日帰京する。

富士登行 (明治14年8月7日～8日)

8月7日、早朝、宿舎を出る。乙女峠を越え、御殿場に行く。箱根から5里。東口登山道の須走に至る。箱根から須走まで3里。午後2時半、山田屋で休憩する。合力を雇い登山を開始する。馬返を経て中食に至る。夕方までここで休憩する。二合目の石屋に投宿する。「適々旧曆七月十三夕ニ属ス天晴レ月明カナリ一望山河ヲ俯シ夜気稜トシテ草露霜ヲ帯ブルカ如ク恰モ晩秋十三夕ニ異ラズ」。翌午前3時、五合目でご来光を仰ぐ。午前10時前、山頂に達する。「富峰ノ高且ツ大ナルヲ然レトモ嶽上ニ一登セズンハ能ク其万一ヲ想スベカラス故ニ人若シ余ニ富峰ノ高大ヲ問ハハ余将ニ答ヘントス君先ツ一登スベシ而後余其高大ヲ語ラント」。下山する。須走を経て長原に宿をとる。

8日、4時、宿を立ち、7里程歩き、沼津に至る。沼津で学友(本間氏)と会う。歩いて12時に三島に着く。昼食をとり休憩し、箱根に登る。夕方、宿舎に帰る。

房総漫遊 (明治15年3月30日～4月9日)

明治15年3月30日、添田・浜田・中川・加藤氏と房総一周の旅に出る。晴れ、市川八幡を経て正午船橋に至る。午後、馬加を経て検見川村に入る。ここから海浜の道を歩く。曾我野を経て、浜野から八幡に行き、八幡に宿をとる。

31日、早朝宿を立ち、五井、姉ヶ崎、奈良輪を経て木更津に入り昼食をとる。六手村から鹿野山に登る。山頂の旅館丸七に宿をとる。山頂の眺望を楽しむ。夜景に観音崎の灯台の明かりを見る。東京から八幡まで12里半、八幡から木更津まで8里、木更津から鹿野山まで4里だった。

4月1日、雨天のため眺望かなわず。山を下りて、金東村の「旅店」島屋で休憩する。雨の止む気配ない。道中の山水に趣きがあった。雨の泥道を歩き、夕方天神郷に着き、梅田屋に宿をとる。夜、寝具の汚れが気になり寝付けなかった(「夜ニ入りテ寝ニ就ク寝衿破レテ且ツ垢アリ眠ニ就クニ苦ム」)。

2日、晴、那古観音に参詣する。風景優れる。鏡浦を観る。北条村を経て、館山に入る。海浜沿いに歩き、洲崎に至る。洲崎明神がある。一西村を経て根本村に宿をとる。「此辺土民ノ言語甚タ野鄙ニシテ都人ニ通ゼザルモノ多シ然シテ人情ニ至リテハ極メテ朴質ナリ」。

3日、雨、中根村から海浜地帯を歩く。「安房太ノ社」があって天大主尊を祀る。大師寺に参詣する。大滝村に入る。石窟がある。山間を歩いて海浜に出る。滝田村の灯明台を見る。正午、白浜村に入る。平館村で宿をとる。中根村から7里程の距離にある。

4日、晴、風あり。宿を出た後、蝙蝠洞という石窟を見る。江見村に達し昼食をとる。頼朝伝説のある洞窟、滝などをみる。雨となる。前原に宿をとる。木村氏が来訪し、酒をのむ。

5日、晴、前原から3里余のところにある清澄寺に参詣する。天津村から山路となり、(清澄山)山頂に達する。鹿野山(379m)とほぼ同じ高さの山(377m)。日蓮も入った堂宇がある。風景すこぶる美のところ。水田はなく、林業を生業とする。小松村の祖師堂に参詣する。4時、宿に帰る。県・別所両氏来訪し、酒をのむ。

6日、曇、午前中は就寝。午後、(小松)村内の小学校で演説を行う。約200人が聴講する。それぞれ2題の演説をする(「午後村内ノ小学校ニ到リ學術演説会ヲ開ク来聴スルモノ二百余名余輩各々二題目ヲ演ス」)。夕方、宿に帰り、木村・県・別所他4、5名と親睦会を開く。夜遅くまでのむ(「杯盤献酬夜半ニ達ス」)。

7日、晴、前原を出て、天津を経て、小湊に至り、誕生寺を参拝する。山路を7里歩き、小田木に宿をとる。

8日、晴、丘山を越え、田園地帯を渡り、長柄山で昼食、千葉に宿をとる。この日の行程は12里だった。

9日、雨、行徳から舟で東京に帰る。

北越遊行(明治15年7月6日～9月7日)

明治15年7月、仙田氏と共に帰省する。

7月6日、雨、午前2時、馬車に乗る。板橋に着く頃、夜が明ける。熊谷で雨が上がる。信楽で休憩し、午後4時、前橋に入り、白子屋に宿をとる。

7日、宿を出て、沼田に向かう。途中、知人にあう。橋が完成していないため間道を行くが、道に迷い、清水街道に出る。雨がひどくなり、湯花に着く頃、日暮れとなり、宿をとる。前橋から13里余の距離だった。

8日、湯花を出て、湯檜曾を経て、武能から清水峠にかかる。「山高ク路険ニ霧深ク風寒シ林間猶ホ残雪ヲ覆テ行クアリ頂上ニ一憩シテ山ヲ下リ清水村ニ入ル」。午後4時、六日町に入る。

9日、8時、舟に乗り、午後5時、浦村に着く。

8月上旬、魚沼郡広瀬郷に遊ぶ。小千谷、信水、和奈津を経て、午後5時、和田村に着く。山間の名勝に遊ぶ。

9月1日、斎藤軍氏と共に帰京の途に就く。小千谷から「水ヲ渡リ」、天王で休憩、川口から間道を通り、田麦山村に行く。大淵氏、堀虎氏と合流する。

2日、田麦山村に滞在。

3日、晴、田麦山を出て、3里、浦佐で休憩、4里、六日町に休む。午後、六日町を立ち、4里、清水村に宿をとる。

4日、炎天下、早朝、清水峠にかかる。峠を下り、武能の茶亭で休む。午後、湯花に着き、宿をとる。

5日、湯花を出て、前橋に行く。油屋で休憩、午後6時発の馬車で東京に向かう。

6日、昼頃、板橋に着く。馬車から「小車」に乗り換え、王子村に入る。扇屋に宿泊する。

7日、東京・小石川に着く。

筑波紀行（明治16年8月3日～12日）

明治16年8月3日、曇、午前6時、（藤井宣正氏と共に）東京牛込を出る。千住、草加、越ヶ谷を経て、粕壁（春日部）で宿泊する。

4日、粕壁から杉戸に向かう。幸手、栗橋を経て、利根川を渡り、中田で休憩、磯部村に入り、勝願寺に一泊する。

5日、勝願寺の隠宅を訪ね、一泊する。

6日、車行し、鬼怒川を渡り、下妻に至り、休憩する。磯部から6里の距離。下妻を出て、大宝八幡社に参詣する。千勝明神社に参詣、社前の茶店で昼食をとる。「田徑ヲ涉リ小江ヲ過キ筑波ニ向フ」。午後3時、「筑波ノ駅街」に到達する（筑波山は標高877m）。旅亭を駅中第一の楼・江戸屋とする。千勝から山麓まで3里半。「風景実ニ雅ナリ」。一憩して「白瀑ノ瀑布」を観に行く。

7日、江戸屋を出て、拝殿に参詣、男体山に登る。山頂の絶景を楽しむ。女体山に登る。下山し、上曾に至る。この間、のべ3里の行程。一憩し、大增に出る。この間、2里。昼食をとり、板敷寺、稲田寺を訪ねる。大增から稲田村まで2里、笠間に向かう。笠間には稲荷社がある。同社門前の（老舗の）井筒屋を宿とする。筑波本駅からここまでおよそ十里。筑波山から笠間まで平坦な道だが、炎天下で難儀する（「此日熱天暑風背面汗珠ヲ躍ラス故ニ歩行大ニ苦ム客舎ニ入りテ始メテ快ヲ覚ユ苦楽相償フモノカ」）。

8日、曇、6時、笠間を出て水戸に向かう。道路には馬車が往来する。午前10時、「水戸上市泉街ノ客亭鈴木楼」に入る。笠間から約6里。午後、客舎を出て旧城址、鴻道館、県庁、病院、師範校を一見する。旧友佐々木勝氏を訪ね、共に偕楽園で遊ぶ。菊地氏を訪ね、談笑する。夕方、旅館に戻り、夜、菊池・佐々木両氏と茶会を開き、旧事を語る。

9日、青柳球平氏を旅亭を訪ねる。舟で那加川を下る。水行三里、湊町に着く。再び川を越えて祝街を過ぎ、大洗神社に参詣する。門外の割烹店・魚末庵で夕方まで酒を飲む。眼前に太平洋が広がる絶景の地で江の島以上と思った。同庵に急遽宿をとる。

10日、魚来庵を出て、磯浜を経て、大貫村に入る。村では七夕を祝っていた。午後、銚田に着く。磯浜から7里。午後8時の汽船に乗り、夜10時半、根三太に着く。下船し、客舎に入る。

11日、朝5時、客舎を出て、鹿島神宮に参詣する。一人の参詣客もなかった。客舎に戻り、朝食をとる。9時半、小汽船に乗り、香取に向かう。津之宮村に着し、香取神社に参詣する。鹿島から香取まで4里。津之宮の茶店で休憩、夕方まで昼寝をする。夜9時、輪船に乗り、利根川を東京へ向かう。津之宮から東京まで十五六里にして下船、車行、2里8丁にして7時半、江戸川岸に至る。上記の輪船はここで船客を待っていた。10時、乗船し、午後3時、

船、東京蛸殻町に入る。下船し、直ちに車に乗り、三河町三河屋に入る。洋食を食べて帰京の祝宴とする。昼寝して牛込の客寓に帰る。8月12日のことなり。同行者は藤井宣正氏。

冬夏遊跡（明治16年12月25日～明治17年9月19日）

明治16年12月25日、土子、浜田、本間、藤山、久米、中川の各氏と共に熱海の湯治に行く。汽車で神奈川まで行く。神奈川から馬車で小田原まで行き、小田原で宿泊する。

26日、小田原を發し、午後熱海に至る。浴楼露木を旅館とする。客窓で年を越す。

明治17年1月1日、伊豆山神社に遊ぶ。

3日、十国峠に登る。

4日、朝、帰京の途に就く。同行6人。小田原片桐に宿泊する。

5日、藤山、中川、浜田氏と分かれる。3氏は江の島に遊ぶため。自分は土子氏、久米氏と馬車、鉄道に乗り、午後、東京に帰る。

明治17年4月6日、早朝、長崎、川村、加藤の3氏と江の島に遊びに行く。午後、江の島に着き、恵比須屋別亭に宿泊する。

7日、鎌倉、横浜を経て、帰京する。

明治17年7月16日、帰郷の途に就く。午前11時、上野を發し、車行4時間にして高崎に着く。直ちに馬車に乗り、渋川に入る。連日の雨で道が悪く、また夕方に近かったため渋川に宿をとる。

17日、雨、渋川を出て沼田に向かうが、橋が落ちて通行止めとなり、迂回し、中山に向かう。湯之宿で昼食、午後法師温泉に入り、宿をとる。渋川から法師まで12里。

18日、法師温泉を出て、三国を過ぎ、関村から人力車で六日町に入る。松屋に宿をとる。

19日、午前4時、川船に乗り、小出、小千谷を経て、11時半、帰村する。道中、全て雨だった。

7月23日から26日までの6日間、三島郡服之町学場に遊ぶ。

7月29日から31日まで3日間、長岡に留まる。

8月1日から7日まで6日間、新潟に滞在。この前後、暑さが最も厳しかった。しかし、毎夜、月を観て楽しむ。「旧七月中旬ニ当リ毎夜ノ清風涼月快ヲ洗フカ如シ三日夜白山ニ涼ヲ納レ四日夜日和山二月ヲ観ル」。

8月7日、新潟から三条に移る。三条では、「四日町教校ニアリ毎夜書窓ノ月ヲ玩フ幽趣限りナシ」。

8月13日、中蒲原新津駅に転遊する。

23日より3日間、鳥越に遊ぶ。国中の漫遊を終えて、帰京の途に就く。

9月14日、家を出発する。その日、浦佐駅丁子屋に一泊する。

15日、雨の中、清水街道を長崎村まで車行する。長崎から清水まで歩くが、雨が激しくなる。盆を傾けるような雨となる。清水から溪間に入る。丸の沢に至る。午後3時前だが、暴

風雨のため歩行困難となる。小屋で一夜を明かす。

16日、雨が上がる。途中、橋が落ち、歩行も困難を極める。武生村に着く頃、晴れる。湯檜曾に至る。川が増水する。真庭小駅に至り、一泊する。

17日、真庭を出て、沼田を経て小津に達するが、舟運不通で、道を丘上に転じ、渋川に向かう。ここも利根川が増水で不通と聞き、八崎に入り、前橋に向かう。前橋に至る前に5時となり、松阪屋に宿泊する。川が増水、鉄橋の損傷で、鉄道不通との情報ある。

18日、前橋を発し、玉村に向かい、本庄に出て汽車に乗ろうとする。しかし、新町より発車するとの情報があり、道を転じて新町に向かう。増水で川を越えることができず、舟子を6、7名雇い、川を渡り、新町に入るが、汽車不通。すでに午後3時、本庄に行こうとしたが、橋が落ち、船もだめだったため亀屋に宿泊する。

19日、川を渡り、本庄に入るが、汽車不通。直ちに人力車で深谷に向かう。橋が落ち、迂回し、間道を通って深谷に至る。1時間程汽車を待ち、乗車、2時半、浦和駅に着く。浦和、王子間が洪水のため鉄道不通となる。人力車で戸田川畔に行くが、兩岸とも増水、舟に乘ったり下りたりして午後6時、東京に着く。9月19日のことだった。

府下遊処（明治11年4月～明治17年11月11日）

明治11年4月から明治17年11月11日までおよそ6年間の（東京）府下の名所旧跡の訪問記録。最も多かったところは、王子飛鳥山道灌山、音羽護国寺、向島花苑（それぞれ「拾余回」）。次に多いのが、亀戸天神、赤坂山王権現（各6回）、続いて、滝ノ川、荒川薬師、堀之内妙法寺（各5回）、吹上御苑、池上本門寺、大森蒲田梅園、堀切菖蒲、（亀戸天神）臥竜梅（各4回）、以下略。

豆州漫遊（明治17年12月26日～明治18年1月6日）

明治17年12月26日、松本、藤井、吉村3氏と共に伊豆に行く。（鉄道で）新橋を発し、神奈川を経て、小田原に一泊する。

27日、石橋、米神、根府川、江之浦、吉浜の各村を経て、午後3時、熱海に着く。

28日、29日、浴楼に休息する。

30日、雨、浴室に過ごす。

31日、晴、熱海を出て、村背（高嶺）に登る。割石之台で一憩、軽井沢に下り、平井を経て、仁田村で休む。葦山及び修善寺に行く。葦山城址、江川太郎左衛門の代官屋敷跡を見る。頼朝の旧蹟・蛭ヶ小島旧宅跡を見る。明月天に掛かる。修善寺温泉、修禅寺を参詣する。

明治18年1月1日、修善寺で新年を迎える。「余輩浅羽浴楼ニアリテ今夕ノ年ヲ送り月下新年ニ入ル奇ト謂フヘシ」。

2日、修善寺を立って、午後、古奈に着く。一憩して大場村を経て、三島に至る。三島に一泊する。

3日、三島を立ち、軽井沢から日金嶺を越えて熱海に帰る。同行者は藤井、吉村、中川、三宅の4氏。

4日、熱海に滞在。

5日、露木楼を出て真鶴港に遊ぶ。福浦、岩村を経て、江之浦に出る。夕方、小田原に着く。

6日、小田原を立って東京に帰る。同行者は、藤井、中川、雪埜の4氏。

秩父遊行（明治18年4月1日～7日）

明治18年4月1日、学友棚橋一郎と共に上野を出て熊谷に行く。雨がひどくなり、熊谷の小松屋に宿をとる。夜になって雨が雪となる。

2日、一面雪となる。熊谷を出て秩父街道を進む。大麻（生）、大瀬田、中荒川、小前田の各村を過ぎて寄居に至り、昼食をとる。晴れてくる。熊谷から寄居まで5里。野上、皆野を経て、大宮（=秩父）に入る（秩父本道）。しかし、道に迷い、荒川を渡り、山道を歩く。雪深く、歩行困難を極める（「嶺上雪深クシテ脛ヲ没ス加フルニ人家ナク足跡ナク大ニ困難ヲ極ム山溪ヲ出テテ三澤黒谷大野原ヲ過キテ大宮ニ入ル」）。三澤、黒谷、大野原を過ぎて夕方大宮に入る（道に迷ったおかげでかえって1里程近道となった）。寄居から大宮まで7里。鉢形城址、秩父暴徒（事件）について記す。秩父の地理、風俗等について記す。旧友宮前謙二氏に会う。

3日、晴れ、秩父神社に参詣する。武甲山の傍ら、影森村を過ぎて橋立鍾乳洞・橋立観音をみる。白久村から三峰新道を通って大滝村に出る。荒川上流の溪谷美を賛美する。午後2時、三峰山に登る。山頂の三峰神社に参詣する（「(三峰神社の) 社門ニ達ス深林ノ中ニアリ社宇ハ稍、壮大ニシテ且ツ美麗ナリ」）。三峰神社について詳しく記す。

4日、三峰山を下り、大滝、白久両村を通り、那久村に入る。昼頃、大宮（秩父）に入る。和銅について記す（「皆野近傍ニモ鉞跡アリ是レ昔時和銅ヲ出シ和銅ノ改号アリシ古跡ナリ」）。

5日、朝、大宮を発し、芦ヶ窪村を経て、飯能に行く。大宮から飯能まで9里余り。旅亭金子屋に泊まる。

6日、雨、飯能を出て、箱根ヶ崎に着く。この間、2里半。拝島に行く。さらに八王子まで行く。八王子から馬車で駒木野に行き、ここで一泊する。学友山崎鉞二郎と会う。

7日、東京に帰る。

帰省第四（明治18年7月18日～8月31日）

（明治18年）7月18日、吉村正、高頭暢二氏と共に本郷の寓居を出る。午前5時、上野駅で汽車に乗る。9時、高崎に着く。馬車に乗り、渋川を経て、湯原の内田屋に泊まる。この日は午前中、雷雨がひどく、馬も進まなかった。そのため夜10時過ぎに旅館に入る。

19日、湯檜曾、武生を経て、旧道清水峠を上る。午後1時、清水（駅）に着く。4時、六日

町に入る。

以下は帰省中の小旅行。

20日、旅亭目黒を出て、舟に乗る。午後1時、(浦)村に着く。終日雨。

27日、雪台村を経て長岡に行く。田中、長尾両氏を訪ね、妙宗寺に泊まる。

28日、大橋、赤沼両氏を訪ね、再び妙宗寺に泊まる。この日、川上、松野、毛利氏などが来訪し、談をもつ。

29日、巻之山、稲川を訪ね、槇島藤島宅に泊まる。

30日、高瀬、松浦氏を訪ね、家に帰る。連日、炎晴。

8月3日、老母と栃尾又に浴するため大河原、妙見、川口を経て、小出島に行く。舟津屋で馬を雇い、午後6時、栃尾又に入る。

6日、栃尾又を出て、近くの大湯温泉に入る。二つの温泉の質はほとんど同じだが、温度は大いに違った。

11日、栃尾又を出て、和田村に移る。松木氏宅に2泊し、13日に帰る。

15日、南蒲原中野村の吉村氏宅に遊ぶ。

16日、長岡学生懇親会に出席する。

23日、長岡での祝宴に出席する。夜、野本恭八郎氏宅に泊まる。

24日、小金井権三郎、秋山鋼太郎両氏を訪ね、夕方、家に帰る。

28日、広川広四郎氏と共に上京の途に就く。夕方、六日町に泊まる。宇尾野藤八、太田銚三郎両氏に会う。

29日、4人と共に清水峠を越え、湯檜曾、高崎にそれぞれ一泊する。

31日、午前10時、東京に入る。

2. 3 「西行紀行」

以上のように『漫遊記』は複数の小旅行記からなるが、とりわけ郷里・長岡から京都までの(生まれて初めての)旅行内容を綴った「西京紀行」は、その後の円了の観光行動と旅行記の特徴を知る上で重要である。「西京紀行」は、円了の旅行観、観光行動、何よりも円了旅行記の原点となっているからである。

「西京紀行」は東本願寺の命により郷里・浦村から京都へ上洛する道中の体験・出来事を綴った旅行記だが、旅行者としての円了の姿を生き生きと描き出している。とりわけ木曾街道の景観美が円了の心を捉えた(木曾の「山水ノ風景ニ至テハ蓋シ之ヨリ富メルハナシ」)。旅行中、円了は山紫水明の鑑賞を最大の楽しみとした。苦しい徒歩旅行も風光明媚に触れることで報われた(「山溪ノ風光耳目ヲ娛マシムルコトアリテ更ニ旅行ノ艱苦ヲ覚エス」)。

木曾の溪谷美に感動した円了は、「天然ノ景色固トニ雅ナリ往還ノ人此景ヲ問ハスシテ過ルモノ多シ余景色ノ為メニ之ヲ悲ム」とまで記している¹¹⁾。この書き方は、後年、「館主巡

回日記」に見られる以下のような記述を想起させる。(熊野の景観美を発見した円了は)「山水の美は木曾の勝あり日光の奇ありといへどもこれを熊野の奇勝に比すればはるかにその後
に瞠若たるありさまなり・・・しかるに文人墨客のいまだその勝を天下に紹介せざるは風景
のために不忠の大なるものにあらずしてなんぞや」(井上[1997a]127頁、引用)。

3. 移動の方法—交通利用

旅行は交通手段を必要とする。近代的な交通機関が整備されていない当時の主要な移動手段は徒歩だった。特定の区間のみ、汽船、人力車、馬車を利用した。鉄道は未整備であったからその利用は限られた。円了が初めて汽車に乗ったのは、明治11年(1878)4月、東本願寺の留学生として上京するときのことだった。京都から神戸までと横浜から新橋までの区間を利用している¹²⁾。その後、新橋～横浜間は、熱海や江の島・鎌倉へ行く際、利用するようになった。「寓居ヲ発シ鐵路ニ駕シテ神奈川ニ到ル」(「江島紀行」)。

劣悪な交通事情の中にあっても円了は好んで旅に出た。旅行は旧街道筋を進むが、抜け道である間道も利用した。徒歩による移動は1日10里前後(約40キロメートル)だった。午前3時に出発したこともある。「暁三時客舎ヲ発シ燭ヲ提テ行ク」(「日光并奥州紀行」)。夏は汗びっしょりで歩く。「此日熱天暑風背面汗珠ヲ躍ラス故ニ歩行大ニ苦ム」(「筑波紀行」)。雪の日、大宮(=秩父)に行ったが、道に迷い、「雪深クシテ脛ヲ没ス加フルニ人家ナク足跡ナク大ニ困難ヲ極ム山溪ヲ出テ三澤¹³⁾黒谷大野原ヲ過キテ大宮ニ入」った(「秩父遊行」)。洪水で橋が流され迂回を余儀なくされたこともある。「橋架ノ落ツルアリ山背ヲ巡テ駈路ニ達ス」(「西京紀行」)。「本道ノ橋梁悉ク雨ノ落ス所トナリ駅前ニ達スルコト能ハス」(「日光并奥州紀行」)。暴風雨の中、泥道を歩く。「晚風雨ヲ吹キ天暗ク泥深シ衣襟湿テ將ニ滴ラントシ・・・脚疲ルルコト甚シ」(「房総漫遊」)。

時折利用する舟運や人力車(腕車)が歩行の疲れを癒してくれた。舟運の利用は乗船時間を休養や読書に充てることができる。漢詩も作った。「舟中ニアリテ偶然一絶ヲ得タリ」(「西京紀行」)。舟運は意外に速い。「客船ニ上ル水満チ波急ニ舟行甚タ速ナリ」(「日光并奥州紀行」)。利根川利用の銚子行きは夜9時半に乗船、翌朝6時に着くというものだった¹⁴⁾。「夜九時半衆客ト共ニ上船シ輪行シテ銚子ニ至ル時已ニ六時天全ク明ナリ」(「銚子紀行」)。琵琶湖の舟運も利用している。「米原ニ発シテ湖船ニ上リ風ヲ負テ西走ス・・・大津ニ着岸ス・・・湖面十八里ヲ帆走セリ」(「西京紀行」)。海上交通は国内留学のため京都から上京する際、神戸から横浜まで汽船に乗った。この時は海が荒れ、神戸港で4日間足止めを食った。「神戸ニ着シ滞在スルコト四日ニシテ五日午後六時汽船ニ上リ海程ニ就ク・・・遠州灘ニ罹リ風雨ニ逢ヒ船脚ヲ為メニ遅ク七日夜九時漸ク横浜港ニ着ス」(「西京紀行」)。

人力車(腕車)は現代でいえばタクシーの利用に相当する。疲労を覚えたときなどに利用した。熱海に行く際、藤沢から大磯まで利用したことがある。人馬の往来はその街の活気を

映していた。「来往ノ人車先后織ルカ如シ」(「西京紀行」)。人力車がない場合もある。「此日燃ルカ如シトイヘトモ駅ニ車馬ナク村ニ休亭ナク歩行甚タ労苦セル」(「日光并奥州紀行」)。深夜の馬車利用もあった。本郷から板橋までの区間だった。「帰省ノ途ニ就ク六日午前二時・・・・東北馬車会社ヨリ馬車ニ乗シ板橋ニ至リ天漸ク明ク雨冷カニ風寒シ熊ヶ谷ニ至レハ雨全ク霽ル」(「北越遊行」)。

以上のような交通利用の経験は後年の巡講にも活かされるが、旅行記にみる交通利用の記録は極めて正確、客観的で、当時の交通事情を把握する上で貴重な史料・記録となっている¹⁵⁾。

4. 旅行時の関心事—観光行動—

旅は好奇心を刺激する。普段見慣れたものでもどことなく目新しく感じられる。旅行中、円了が関心をもった事物を『漫遊記』にみる。そこに円了の観光行動を探る。

4. 1 旅情・詩情と景観美

旅は旅情を育む。「顧テ故郷ヲ望メハ已ニ米山ノ一脈ヲ隔テテ遙ニ雲天ノ外ニアリ遊子始テ他郷ニ入ルノ情ヲナス」「今日ハ異郷ノ客トナル心ヲ傷マシム江上ノ客是レ故郷ノ人ニ非ス遊子ノ心中憶フヘシ」(以上「西京紀行」)。円了は心に残った風景を詩情を込めて漢詩に詠み込む。「江州路ニアリテ一律ヲ得タリ」「西ニムカフ途上五律ヲ得タリ」「船中ニアリテ一絶ヲ得タリ」(以上「西京紀行」)。詩情はもっぱら風物に向いた¹⁶⁾。そこに自らの旅情・旅愁を確認する。「去家十日到濃州 満眼風光動客愁 身在晴天白雲外 山河千里思悠悠」(「西京紀行」)。

円了の旅の楽しみは風光明媚の鑑賞にあった。行く先々で山紫水明と出会い、その風光を愛でた。「湖上ノ風景尤モ雅ナリ」(「西行紀行」)。「山水ノ風景・・・・耳目ヲ娛マシム・・・・旅行ノ艱苦ヲ覚エス」(「西行紀行」)。伝統的な風景も自らの目でその美を確認した。「近江八景眼中ニアリ余未タ此ノ如キ勝霊ヲ見サル也」(「西京紀行」)。日光靈廟の「美麗」「彩光」にも目を奪われた。「其美麗心ヲ奪ヒ其彩光目ヲ瞠シ称スルニ語ナク筆スルニ字ナシ」(「日光并奥州紀行」)。後年、全国を隈なく回った円了は各所の風光明媚を堪能、名所・旧跡に通じていた。熊野を旅し、その佳境を詠じた円了は、「日光を見ずして人造の美を説くなかれ、熊野を見ずして天然の美を談ずるなかれ」と記しているが¹⁷⁾、『漫遊記』にもすでに類似の表現が見られた。「往還ノ人此景ヲ問ハスシテ過ルモノ多シ余景色ノ為メニ之ヲ悲ム」(「西行紀行」)。

旅では四季折々の美しい自然の風物や景観との出会いがある。円了はそれを「楽しみ」に据えた。「菜花正ニ盛ニシテ残桃田園ヲ擁シ其趣譬フルニ由ナシ」(「銚子紀行」)。人の心は活物である。様々なものに触れて発し、感じて動く。その機会を与えてくれるのが旅行だった。円了の旅には貝原益軒『楽訓』にも通じる以下のような効用があった。「旅行して他

郷にあそび、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙吝をあらひすすぐ助となれり。是も亦わが徳をすすめ、知をひろむるよすがとなるべし」(貝原益軒『楽訓』卷之上)。¹⁸⁾

4. 2 風俗・民俗

旅行記には見聞した各地の風俗・民俗の印象・所感が記される。国内外各地の見聞は自ら比較の視座を養う。円了は旅行を通して諸国の地理・人情・物産等に通ずることとなった。それは後年『妖怪学講義』『日本周遊奇談』といった著作に結実していったが、『漫遊記』にも以下のような観察的な記述が見られた。

「松本ハ長野ニ競フ都会ニシテ市街繁盛屋宇梢、雅麗ナリ」(「(京都は) 都会ノ都会ト云フヘシ・・・街縦横砥ノ如ク矢ノ如シ其風俗ヲ察スルニ言接巧美動作閑雅実ニ皇都ノ遺風アリ」(以上は「西京紀行」)。「此辺(房州根本村) 土民ノ言語甚タ野鄙ニシテ都人ニ通ゼザルモノ多シ然シテ人情ニ至リテハ極メテ朴質ナリ」(「房総漫遊」)。

4. 3 酒と交遊

円了は、一時、禁酒に努めたこともあったが、生来酒を好んだ。学生時代は放歌高吟、学友たちと大いに飲んだ。「各々郷歌ヲ発ス献酬数行杯盤狼藉酒尽キ殺空フシテ皆散ス」(「寓居記事」)。旅の疲れも酒で癒した。「浴終リテ楼ニ依リ杯ヲ呼テ声ヲ放ツ数日ノ苦熱一散シテ満懐洗フカ如シ」(「筑波紀行」)。「『漫遊記』にも以下のような酒に関する記述が見られる。「一酌一吟夜ノ闌ナルヲ知ラス」(「江島紀行」)。「晩ニ楼ニ登リ杯ヲ命ス時中元ニ当リ・・・余輩酔后又歩ヲ散シテ通衢衢ヲ徘徊シ玉川ノ上ニ至ル」(「寓居記事」)。「豊酒アリ一酌スベキ」(「箱根客寓」)。「夜ニ入り木村氏来訪スルアリ酒話ヲ更ニ移ス」(「県別所兩人来訪ス酒ヲ命シテ夜ニ入ル」(「房総漫遊」)。

旅行記にみる交遊の多くは酒を介して行なわれている。円了の旅行は帰省・帰京を含め常に友人といっしょだった。旅先でも学友を訪ね、行動を共にすることが多い。会津で学友を訪ねた円了は、「一笑一談時ヲ移」し、「共ニ(会津) 城壙ヲ一見」した(「日光并奥州紀行」)。「余輩井上ニ泊ス其夜旧友宮前謙ニ氏ニ面シ当地ノ実況ヲ伝聞ス」(「秩父遊行」)。友人宅に泊まったこともある。「十一日栃尾又ヲ出テテ和田村ニ移リ松木氏ノ宅ニ泊シテ十三日家ニ帰ル・・・二十三日又長岡ニ出テテ祝宴ニ連ナリ其夜野本恭八郎氏ノ宅ニ泊ス」(「帰省第四」)。このような旅先での交遊を通じた人的ネットワークの形成は「館主巡回日記」や『南船北馬集』、海外視察旅行記にも窺うことができる。そこに円了の交遊の深さと広さを知ることができる。

4. 4 月

円了は後年の旅行記でしばしば月の様相(形状)を記している¹⁹⁾。『漫遊記』では取り立てて月の形状を記している箇所はないが、月(の美しさ)には魅かれていた。『漫遊記』にみる月の記述は以下の通りである。

「斯夕偶々月明ニ会シ夜景更ニ幽ナリ」（「江島紀行」）。「月色蟬声恰モ塵界ヲ去テ仙郷ニ遊フカ如ク」「親友四五名ヲ会シテ清宴ヲ開ク時月夜ニ当リ千里雲ナクシテ長空洗フカ如シ明月林端ニ懸テ樹影蒼然タリ」（以上「寓居記事」）。「旧七月中旬ニ当リ毎夜ノ清風涼月快ヲ洗フカ如シ・・・毎夜書窓ノ月ヲ玩フ幽趣限リナシ」（「冬夏遊跡」）。「明月天ニ懸リ山水霜ヲ帯ヒ塵外ノ趣アリ」（「豆州漫遊」）。

月は円了の漢詩の重要なモチーフとなっているが、『漫遊記』において月を詠み込んだ漢詩は「蟬声月色夏方深」（「箱根客寓」）、「一痕新月笠間城」（「筑波紀行」）のみだった。これは同時期に漢詩集『屈蠖詩集』が編まれていたためかもしれない。『屈蠖詩集』には旅行中に作られた漢詩が多く収められている。『屈蠖詩集』は7部からなり、269編もの漢詩が記されている。うち月が出てくる漢詩は30編ほどだった。なお「西京紀行」には月の記述はないが、これは旅行中、ほとんど雨天の日が多く月が見えなかったからだと思われる（あるいは月の見える時期ではなかった）。「凡ソ家ヲ辞シテヨリ十三日迄ハ一日モ雨ニ遭ハサル日ナシ」（「西京紀行」）。

4. 5 蟬、犬と鶏

蟬の声も（後年の蛙の声と同様）季節の到来を告げる漢詩のモチーフとなっている。「樹蜜蟬声静」（「西京紀行」）、「蟬声止ムコトナシ」（「日光奥州紀行」）、「蟬声静処読書声」「蟬声月色夏方深」（「寓居記事」）。鶏と犬はそのなき声が関心の対象となる。「鶏犬声中日将午」（「日光奥州紀行」）、「犬ノ月ニ号ス」（「寓居記事」）、「鶏犬無声昼寂然」「鶏犬声中日当軒」（「北越遊行」）、「一路鶏声午下風」（「銚子紀行」）、「犬声喚起清風夢」（「箱根客寓」）。

鶏、犬は、ただその声を聴くのみで、鶏、犬そのものの記述はない。ちなみに『漫遊記』に見られる鶏、犬の鳴き声は、「館主巡回日記」、『南船北馬集』では、以下のような蛙の声と蚊音に代わる。「蛙声趣誘ふ」「蛙声客窓に入る」「夜中、蚊雷を聞く」「蚊影を見る」。

4. 6 「不潔」と「怠惰」

円了は「不潔」を嫌うとともに「怠惰」を軽蔑した。銚子に行ったときのこと。「夜ニ入りテ寝ニ就ク寝衿破レテ且ツ垢アリ眠ニ就クニ苦シム」（「房総漫遊」）。「不潔」の記事は後年、特に海外視察旅行などで目につくが、『漫遊記』に記された「不潔」の記載は上記一箇所のみである。しかし、後年の旅行記に記される「不潔」記事との関係から留意すべき事項と考える。

円了は、生来「怠惰」を嫌い、勤勉を好んだ。刻苦勉勵を旨とする信条から怠惰な人間や習俗を許せなかったのかもしれない。軽蔑めいた見解が見られる。「此辺（下妻）一帯林叢多ク水田甚タ少シ民間貧家ノ多キハ一ハ地味ノ肥膏ナラザルヲ以テナリト云フ然レトモ人民遊惰ノ風アリテ酒色ニ耽ケリ遠憂ヲ慮ルノ意ナシ而シテ目前ノ利ヲ争ヒ一時ノ快ヲ取ル是レ蓋シ貧困ノ多キ真因ナランカ挙動ノ粗暴ニシテ人気ノ平穩ナラザル亦之レニ本ツク」（「筑波紀行」）。

こうした「不潔」や「怠惰」に対する円了の姿勢は、その後の円了の思想形成にも影響を与えている（ものと考ええる）。円了にとって「貧」は「悪」ではない。「貧」であってもその身を清潔に保つことはできるはずだとの思い（「清貧」の思想）から「不潔」を嫌ったと思われる。もっとも「不潔」を嫌う理由は単に生理的なものだったかもしれない。そもそも「不潔」をあえて好む人はいないからこれを詮索すること自体あまり意味のあることではないようにも思われる。

一方、「怠惰」を嫌う理由として、円了には「辛抱の棒で怠惰の鬼を打て」といった信条があった。怠惰（＝貧）は奮闘努力で克服しなければならないもの、また克服できるもの。そう考える円了にとって、怠惰（＝貧）に甘んじることは許容できなかつたかもしれない。すでに明確な評価基準をもち合わせていた円了にとって、自らの価値観と相容れない事象・世界の拒絶は、後年、仏教的立場から国粹主義を唱え、キリスト教を排撃したことにもつながったのではないかと考えられる。円了は豊富な国内外の旅行体験を通じて広く世界に学ぶことも多かったが、むしろ旅行による内外の見聞は、自らの思想及び日本の優位性を再認識・再確認する機会となっていた（と考えられる）。

5. むすび

「学苦ヲ除カント欲」（『再遊熱海記』）し、「校牢ノ縛ヲ脱」（『寓居記事』）するため、学生時代、円了は旅に出た。学業が嫌だったわけではない。拘束される苦痛を嫌ったのである。むしろ旅行にも様々な苦痛や障害が伴う。が、そこには（心の）自由があった。円了は自由を求めて旅に出た。旅行記に自由という言葉はないが、旅行には日常生活から解放される自由がある²⁰。精神の緊張を解きほぐす効果もある。それが旅行の「楽しみ」となる。生涯官途に就かなかつた円了は何よりも自由な生き方を望んでいた。仮に官途に就いていたなら自由な旅行も自由な生き方もできなかつたろう。

『漫遊記』に収められた小旅行記の題名には「遊記」「再遊」「漫遊」「遊行」「遊跡」「遊処」といった「遊」の字を入れた題名が多い。『漫遊記』の旅行スタイルは、題名通り「漫遊」であり、その目的は「遊興」、そして「観光」にあった。「漫遊」は「自由な旅行」であり、「楽しみ」がある。束縛を嫌う円了にとって「漫遊」は自由そのものを意味し、自由こそは円了が最も重んじたものだった。ただ円了の「漫遊」には「学び」と「交遊」がある（そして、「遊び」もある）。「学び」は「楽しみ」であり、「楽しみ」の第一は景観の鑑賞だった。「漫遊」はまた「交遊」（＝「触れ合い」）を通じて人的ネットワークを形成する機縁となる。円了は多くの学友と旅をし、交流を深めた。井上甫水著『漫遊記』にみる「触れ合い、学び、遊ぶ」旅行スタイルは、観光旅行そのものといってよい。

[注]

*本研究に際し、国際井上円了学会会長・三浦節夫東洋大学教授に貴重なご教示を賜りました。ここに記して謝意を表します。

- 1) 『漫遊記』「館主巡回日記」『南船北馬集』『欧米各国政教日記』『西航日録』『南半球五萬哩』を指す。上記「旅行記」からの引用に際しては一部表記を改めたところがある。
- 2) 旅行記の題名「漫遊」とはあてもなく心のままにあちこちの土地を遊び歩くことをいう。束縛のない自由気ままな旅行である。気の向くまま諸方を回って旅することから享楽的な意味合いを持つ。明治時代はtouristの訳語として「漫遊外人」「観光外人」が当てられたこともある。tourismの訳語に「漫遊」が当てられたこともある。が、「観光」が一般的となった（日本国際観光学会〔2007〕18頁、参照）。その意味で「漫遊」は「観光」の要素を十分含んでいる。
- 3) 岡本〔2006〕第1章「観光と観光学」（岡本伸之著）1～29頁、参照。
- 4) 「甫水」は号である。この号は石黒忠恵の提案により出身地の村名「浦」の字を分解したものである。『漫遊記』の原本は手書きのもので、かつ著者自身の独特の字の癖が見られ、略字、俗字等も多く使われている。『漫遊記』の書誌については、三浦・豊田〔1992〕を参照されたい。
- 5) ちなみに夏目漱石は、明治22年(1889)8月、大学（東京帝国大学）の友人と房総方面を旅行、漢詩文で綴った旅行記『木屑録^{ほくせきろく}』を遺している。
- 6) 『漫遊記』の旅行目的・内容を大別すると以下ようになる。
 - ・業務（東本願寺教師教校入学のための京都行き及び東京大学予備門入学のための上京）・・・2回
 - ・保養及び避暑のための旅行（熱海・湯河原・箱根）・・・4回
 - ・観光旅行（江の島・鎌倉・日光・会津・房総・秩父・伊豆・修善寺など）・・・7回
 - ・帰郷及び帰京のための旅行・・・4回
 - ・その他（富士登山）・・・1回
- 7) 「屈蠖」（くっかく）とは尺蠖^{せきかく}（尺取虫）が身を屈するさまをいう。円了は19歳の明治10年(1877)から25歳の明治16年(1883)までの自作の漢詩をまとめた詩集『屈蠖詩集』を自筆稿本として遺している。新田・長谷川・中村〔2008〕参照。
- 8) 「館主巡回日記」『南船北馬集』では寺社参詣の記録がほとんどない。あっても観光名所の一環として見るといった感じである。
- 9) 「造船所ヲ一見シ」（「江島紀行」）、「横須賀ニ至テ造船所ヲ一覽シテ」（「相州遊記」）。
- 10) 「西京紀行」に関する漢詩は『屈蠖詩集』に収められている。
- 11) ちなみに島崎藤村は『夜明け前』「序の章」で木曾の風景を以下のように描いている。「木曾路はすべて山の中である。あるところは^{そば}唄つたひに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐた。」島崎藤村『島崎藤村全集』第8巻、筑摩書房、1981年8月、

5頁、引用。

- 12) 明治5年、新橋・横浜間にはじめて官営の鉄道が開通した。数年後、大阪・神戸間、京都・大阪間にも敷設された。また宿駅・助郷制度が廃止され、東京～高崎間、東京～八王子間、大阪～京都間などで一齐に馬車輸送が開始された。豊田・児玉[1970]443～445頁、参照。
- 13) 「三澤」は現在の埼玉県秩父郡皆野町三沢。蛇足ながらここは筆者が高校時代まで過ごした地である。『漫遊記』を読み進めていた時、この地名に接し、ある種の感慨を覚えた。
- 14) 近世になって河川交通は著しい発達を遂げ、物資輸送の一大動脈をなすに至った。商品経済の発達には物資の輸送を活発にし、交通運輸の発達を促した。水上交通の積載量は、陸上運輸、すなわち牛馬に比べてきわめて大きく、また運賃もはるかに安かった。利根川本流などの大河では高瀬船などの大船があった。個々の河川、河岸によって河川交通の具体的様相は異なるが、河川交通はそれのみで単独の輸送路となることは少なく、多くは陸路に連絡し、あるいは海上交通と結びついていた。舟運は陸運に比べきわめて有利であったからできるだけ河川または湖沼を利用し、また海上交通も活用した。例えば阿武隈川では米を河口の荒浜まで運び、そこから海路、銚子まで運び、銚子で川舟に積みかえて利根川を遡り、^{せきやど}関宿から江戸川を下って行徳から江戸に達した。なお明治10年には利根川航路に蒸気船「第一通運丸」が就航している。円了も利用したものと思われる。豊田・児玉[1970]332～336頁、参照。
- 15) 後年、円了は、巡講における交通利用について以下のように記している。「本県（岩手県）は交通不便のために種々の乗り物ありて、毎日乗り物を異にするは、他県の旅行の単調なるに比し、かえつて多趣味なるを覚ゆ。これを表示すること左のごとし。一、人力車 二、勅任馬車（久慈町にて用ふ） 三、円太郎馬車 四、荷車馬車 五、和船（津軽石にて用ふ） 六、海汽船 七、川汽船（黄海にて用ふ） 八、石油発動機船（宮古と小本間に用ふ） 九、汽車 十、軽便鉄道 十一、電気鉄道（花巻と志戸平の間にあり） 十二、馬車鉄道（水沢と岩谷堂の間に用ふ） 十三、轎（仙人嶺にて用ふ） 十四、荷鞍つき馬 十五、西洋式鞍馬 十六、自動車 以上十六種あるうち、電鉄を除く外はみなこれを用ひたり。これまた本県の名物の一に加ふべき。」井上[1998b]203～204頁、引用。
- 16) 円了の漢詩集として以下がある。『詩冊』『襲常詩稿』『屈蠖詩集』。このうち『屈蠖詩集』は『漫遊記』執筆の時期と重なる。円了の漢詩の詳細については以下を参照されたい。新田[1998]423～442頁、新田・長谷川・中村[2008]。
- 17) 井上[1997a]126頁、引用。
- 18) 八木[2006]38～41頁、47頁注4、48頁注21、参照。
- 19) 例えば「夜に入れば新月天に懸かる、その形、鎌のごとし」井上 [2003] 288頁。観月は円了の趣味だった。後年の旅行記、とりわけ海外視察旅行記における月の描写には以下のように科学的な観察眼も窺われる。「当夜深更に至り半輪の月を望むにわが日本にて望むとはその形を異にし、月球の左半分にあらずして下半面に光を生ぜるを見る・・・月を北天に望み、

半輪を下辺に生ずるはやや奇異の感なきあたはず」（井上 [2003] 357～358頁、374頁）。このような観察的な月の描写とは異なるが参考のため以下のような例を示す（傍線筆者）。「薄曇りのした空から灰色の月が日本橋側の焼跡をぼんやり照らしてゐた。月は十日位か、低く、それに何故か近く見えた。」（志賀直哉「灰色の月」）この一文はいかに志賀が正確に実際の月を見ていたかの証左といえよう。志賀直哉『志賀直哉全集』第4巻、岩波書店、1973年10月、213頁、引用。

- 20) 「旅に出ることは日常の生活環境を脱けることであり、平生の習慣的な関係から逃れることである。旅の嬉しさはかように解放されることの嬉しさである。」（三木[1965] 132頁、引用）

[参考文献]

- 井上円了[1997a]『井上円了選集』第12巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1997年3月
井上円了[1997b]『井上円了選集』第13巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1997年3月
井上円了[1998a]『井上円了選集』第14巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年3月
井上円了[1998b]『井上円了選集』第15巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年3月
井上円了[2003]『井上円了選集』第23巻、東洋大学井上円了記念学術センター、2003年10月
井上甫水[1992]「漫遊記第一編・第二編」『井上円了センター年報』Vol.1、1992年3月、93～129頁
岡本伸之編[2001]『観光学入門』有斐閣（アルマ）、2001年4月
東海林克彦『哲学のテーマパークとしての哲学堂公園—井上円了の哲学の具体化—』東洋大学史ブックレット9、東洋大学、2014年3月
白川部達夫[2014]『井上円了の全国巡講—旅する創立者 国内編—』東洋大学史ブックレット7、東洋大学、2014年3月
高木宏夫・三浦節夫[2005]『井上円了の教育理念—歴史はそのつど現在がつくる—』（改定8版）東洋大学井上円了記念学術センター、2005年3月
瀧田夏樹[2003]「解説—井上円了の世界旅行記」井上円了『井上円了選集』第23巻、東洋大学井上円了記念学術センター、2003年10月、473～497頁
竹村牧男[2012]『井上円了の生涯』東洋大学史ブックレット1、東洋大学、2012年11月
豊田武・児玉幸多編[1970]『交通史』山川出版社、1970年12月
新田幸治[1998]「解題—井上円了の漢詩について」井上円了『井上円了選集』第15巻、東洋大学井上円了記念学術センター、1998年3月、423～442頁
新田幸治・長谷川潤治・中村聡編訳[2008]『甫水井上円了漢詩集—「襲常詩稿」「詩冊」「屈蝮詩集」訳注—』三文舎、2008年1月
藤田晴啓[2009]「井上円了世界旅行記のサイバートラヴェル化と教育効果」『現代社会研究』第6号、東洋大学現代社会総合研究所、2009年3月、85～92頁
堀雅通[2014a]「井上円了旅行記」『交通新聞』交通新聞社、2014年1月14日号、第1面

- 堀雅通[2014b]「井上円了が旅した『不潔』な国と白夜体験」『Newsletter』東洋大学国際共生社会
研究センター、No.33、February 2014、2014年2月14日、1頁
- 堀雅通[2014c]「井上円了の全国巡回講演、海外施設旅行にみる鉄道利用について」『鉄道史学会
2014年全国大会自由論題報告要旨』鉄道史学会、2014年10月4日、東洋大学白山キャン
パス、1～18頁
- 堀雅通[2014d]「井上円了の鉄道利用」『交通新聞』交通新聞社、2014年11月10日号、第1面
- 堀雅通[2015a]「井上円了の観光行動について」『国際井上円了学会 第4回学術大会 予稿集』国
際井上円了学会、2015年9月13日、東洋大学白山キャンパス、9～10頁、及び当日「配
布資料」1～6頁
- 堀雅通[2015b]「円了の月」『交通新聞』交通新聞社、2015年10月20日号、第1面
- 三浦節夫・豊田徳子[1992]「井上甫水『漫遊記について』」『井上円了センター年報』Vol.1、1992年
3月、130～131頁
- 三浦節夫[1998]「解説—井上円了の全国巡講」井上円了『井上円了選集』第15巻、東洋大学井上円
了記念学術センター、1998年3月、443～499頁
- 三浦節夫[2003]「解説—井上円了と世界」井上円了『井上円了選集』第23巻、東洋大学井上円了記
念学術センター、2003年10月、498～519頁
- 三浦節夫[2012]『人間・井上円了—エピソードから浮かびあがる創立者の素顔—』東洋大学史ブッ
クレット1、東洋大学、2012年11月
- 三浦節夫[2013]「井上円了の全国巡講データベース」『井上円了センター年報』第22号、東洋大学
井上円了記念学術センター、2013年9月、37～160頁
- 三木清[1965]『人生論ノート』新潮社（新潮文庫）、1965年2月
- 八木清治[2006]『旅と交遊の江戸思想』花林書房、2006年5月
- 渡辺章悟[2014]『井上円了の世界旅行—旅する創立者 海外編—』東洋大学史ブックレット8、東
洋大学、2014年3月
- 日本国際観光学会監修、香川眞編[2007]『観光学大事典』木楽舎、2007年11月

Inoue Enryō's Tourist Activities as described in his *Pleasure Travel Diaries* by “Inoue Hosui”

HORI, Masamichi

Abstract

During his life, Inoue Enryō traveled considerably both inside and outside of Japan, and wrote a travel diary for each of his trips. This paper will explore the notion of Enryō as a tourist through these travel diaries, focusing on his tourist activities.

This study employs the following two accounts of Enryō: 1) *Pleasure Travel Diaries* (Inoue Hosui) describes Enryō's travel diary from his student days at University Preparatory School and Tokyo University; 2) *Pleasure Travel Diaries* is comprised of multiple travel diaries.

One of them, “Western Capital Travel Notes”, documents his first time ever travelling from his hometown of Nagaoka to Kyoto. This work exemplifies Enryō's travel diary style. These diaries indicate that Enryō enjoyed engaging in tourism at the places he went to, for which the main purposes were for visiting and appreciating the scenery. He wrote that the beauty of places he encountered captured his heart.

Furthermore, he formed a diverse network of people through his interactions and through his tourism, he acquired a wide-ranging perspective and a comparative way of thinking and viewing different situations. This influenced his cultural comparisons, civilizational theories, and intellectual formation. This paper explores these concepts in depth.

Keywords : “Pleasure Travel Diary”, Travel Diary, Tourism, Tourist Activity, Interaction through Tourism]